

笹川科学研究助成金の思い出

東京大学 東洋文化研究所 青山和佳

笹川科学研究助成金を頂いたのは、東京大学大学院経済学研究科の助手だった頃のことです。「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程 一栄養水準・健康と労働市場参加の観点から」が研究課題でした。この助成金が私自身にとって思い出深いのは、ふたつの理由があります。

ひとつは、海外留学奨学金などを別にすれば、初めて獲得した競争的研究資金だったということです。当時は研究費を頂けたということに感激しました。しかし、いま振り返ってみるとより重要な経験となっているのは、研究計画書を書くということです。ぼんやりとしたアイデアを一定の期間をもったりリサーチ・プロジェクトとしてまとめてみると、研究としての可能性がよりはっきりとみえてきます。また、それを審査員の方々に読んで頂くことを念頭に書くわけですから、「読者」を伝わりやすいように工夫しながら自分の考えを表現するよい訓練になります。若かった自分にいま言葉をかけるとすれば、「実績がないのは駆け出しなのだから当たり前。すべきことは、夢をしっかりと論理的裏付けをもって語ること。勇気をもって進め」ということです。

もうひとつは、じつは初めての出産と育児をしながらフィールドワークに復帰したのが、この助成金による調査研究だったということです。出産と育児というのはそれなりに気力と体力を使うものですので、なかなかフィールドワークに戻るタイミングというのが図れなかったような記憶があります。当時の所属先は女性研究者の数こそ少なかったものの、研究環境や就業条件もよく大変自由で、フィールドワークをせよと強制されることもなかったため、かえって迷うという部分もありました。そんなとき、助成金に応募し、幸いにも採択されたことで、「ああ、自分はやっぱりフィールドワークが好きだし、向いているに違いない」という前向きな想いをとりかえすことができました。また赤ちゃんだった娘を伴って調査地を再訪したとき、住民の方々が大変喜んでくださったことをいまも鮮やかに憶えています。

このように、笹川科学研究助成金は、駆け出しだった私に、研究者としての道を歩み続けていくための大切な橋をひとつ架けてくださいました。正直なところ、プロジェクトの直接的な研究成果については、新しいテーマに挑戦したということもあり大成功といえるものではありませんでした。しかし、その当時に調査地の住民の方々の健康状態を把握しておいたことは、数年後に調査地で生じた重大な変化（キリスト教への大量入信）の背景をさぐる上で貴重な一次資料として活かすことができました。研究活動というものが未知のものを探る営みである以上、その時々でラッキーだったりそうでなかったりするかもしれませんが、続けているとよい展開が得られることが多いという楽観的な気持ちで取り組めるようになりました。

研究活動というものはひとりでは決して続けられないものです。助成金を頂いたことを感謝するとともに、現在そして将来の受給者の皆様のご活躍をお祈りいたします。